



## 鳩は真空の中でならもっと上手に飛べるだろうと思う

学校長 飯山 等

2022年が終わろうとしています。この2学期も学園祭や演劇コンクール、体育大会を何とか例年に近い形で実施にこぎ着けながら、その一つ一つの実現は緊張を強いられる

ことでした。それでも君たちから光を感じることができました。君たちはこの制限された数年の経験で、大谷が伝統してきた大切な精神を減退させることなく、私の心配を老いの感傷と吹き飛ばすようなパワーで、一学期のO-CASTを創出し、学園祭・演劇コンクール、そして体育大会を見事に実現してくれました。その笑顔と歓声が溢れる一日に浴しながら、新たな生命が芽吹き、歴史が更新されるのはこういう状況下なのだとことを、こみあげてくる温かい思いに満たされながら感じたことです。

高校3年生の進学のため模擬面接をされていてこんなことがありました。「このコロナ禍でそれまで当たり前のようにできていたことが、できないという状況に直面することになって、そのできていたことの有り難さ、さまざまな力に支えられてそれができていたのだということを知り、できていることへの感謝の思いがひとしおです。そして自分ができることは何なのかを考えるようになりました。」と語る言葉を聞きながら、若い皆さんに、現実を掬い取る温かな手と、優しく見つめる確かな眼とを備えた、新たな意思が生まれている証しに出会えてうれしく思いました。

題に挙げた文は、18世紀のプロイセンの哲学者、イマヌエル・カントの主著『純粹理性批判』のなかで出会った「鳩は、自由な翼で空気をかき分けつつ、空気の抵抗を感じ、真空の中でならもっと上手に飛べるだろうと思う」に拠っています。学生時代から何度も読破にチャレンジし、多くの翻訳書を開き、幾多の解説書を手に取り、すべて頓挫してきた苦い思いを胸に持ち続けていて、これで最後と読み始めた本(角川選書の中の御子柴善之氏による解説書)で出会った言葉です。

「カントは晩年ようやく自宅を手に入れます。その自宅の書齋にはジャン・ジャック・ルソーの肖像画が飾ってありました。若きカントの逸話の一つに、1762年、ルソーの『エミール』が刊行されると、それをすぐ入手して読みふけり、日課としていた散歩を取りやめたということがあります。同じころカントは、ルソーから「人間を尊敬

すること」を学んだというメモを残しています。その思いが、最晩年まで続いていたのかもしれません」との御子柴氏の文章に触れて、カントの意図とは違うところで、このことは私の胸に響きました。

そして、親鸞聖人の御和讃、「無碍光の利益より／威徳広大の信をえて／かならず煩惱のこおりとけ／すなわち菩提のみずとなる」、「罪障功德の体となる／こおりとみずのごとくにて／こおりおおきにみずおおし／さわりおおきに徳おおし」が想い起こされました。さらに思いは遡り、若いときに目にして、受け容れがたい衝撃で混乱したまま放り出し遠ざけてきた親鸞聖人の言葉、「たとい、牛盗とはいわるとも、もしは善人、もしは後世者、もしは仏法者とみゆるように振舞うべからず」(改邪鈔)が、ようやく受けとめられたような気持ちがしました。聖人のこの言葉の奥底にあるのは「人間への尊敬」ではないか。そして、その心は、あるべき義心として私の側から立てられる指標ではなく、如来の方向から射し込んでくる和らかな光の言葉であったのではないか。

われわれが自身を、善人、後世者、仏法者という、肯定されるべき側面を前面に押し立て、自らを生きようとするとき、そこに決定的に欠けているのは、自身への、そして人間への尊敬ではないか。評価や裁きの心を超絶した地平に広がるいのちの光景、逆に評価の目や正義の心で見ようとする輝きを失ってしまういのちの相。《TO BE HUMAN 人と成る》とは、そのような人間への尊敬をいうのではないか。大谷はそのことの学びをこそ建学の願いとして歩み、今ここにあるのではないか。自身を尊敬する、人間を尊敬する。それは決して直接的な自己肯定心情に立つことや、自己承認的な自尊心の発揚を言うのではないでしょう。

聖徳太子は建国の精神を17箇条として宣布されて、その「十に曰わく、忿を絶ち瞋を棄てて、人の違うことを怒らざれ。人皆心有り。心おのおの執れること有り。彼是すれば我は非ず。我是すれば彼は非ず。我必ず聖に非ず。彼必ず愚かに非ず。共に是れ凡夫ならくのみ。是く非しき理、誰か能く定むべけん。相共に賢く愚かなること、鑲の端無きが如し。是をもって、彼人瞋ると雖も、還りて我が失ちを恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従いて同じく挙え」と彼我・我衆の相共なるすがたを和らかく明らかになされています。

長く田舎の書架で眠ったままに『エミール』を手にしたくなりました。